

平成 30 年 10 月 7 日

南の風 283

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

インターハイ女子決勝、桜花学園対岐阜女子のゲームの勝敗を分けたポイントを分析します。

団体スポーツの世界でよく言われる、「クリティカルモーメント」(勝敗を左右したプレイないし瞬間)を探ってみたのですが、このゲームでは「このワンプレイ」、あるいは「この瞬間」というのを特定することは難しかったです。なぜなら、実力が拮抗している両チームは相手に流れが傾きかけた時に踏ん張る力が半端ではなかったからです。

選ぶとすれば、第3ピリオドの桜花学園のディフェンスと#9岡本の3本のシュートです。

3ピリに入り桜花のディフェンスは、前半に比べさらにプレッシャーが厳しくなります。ボールマンディフェンスだけでなく、オフボールマンに対しても簡単にボールを持たせません。特に#8平下は岐阜女子の3Pシューター、#9林を徹底的にマークし簡単にボールを持たせません。他の選手も何とか桜花のディフェンスを掻い潜ってシュートに持ち込もうとしますが、タフショットとなり点が入らなくなります。また、フリースローも立て続けに4本外してしまいます。そんな中でも#4池田は、果敢に1対1を仕掛け、ディフェンスをずらしスペースをつくりシュートを決めます。このゲーム最大の2ケタの差になった瞬間も、池田はすかさず3Pシュートを入れ返し、点差を1ケタに戻します。しかし岐阜女子は池田以外が得点することができず、思うように点数を詰めることができません。

桜花は、#9岡本がキーマンとなりました。岐阜女子のディフェンスが、#14アマカ、#4坂本、#8平下にマークを集中させると、空いたスペースに岡本がタイミングよく跳び込み、ミドルシュートを決めます。さらに岡本は2本のシュートを決め、岐阜女子を突き放します。

この岡本の3本のシュートが、岐阜女子のディフェンスを混乱させる的を絞りにくくさせました。そして味方のオフenseの相乗効果を生み、アマカのゴール下、平下のジャンプシュートにつながったのでした。結局、このピリオドの10点差が響き桜花学園が勝利します。最終スコア、70対61でした。

勝敗を左右した桜花学園のディフェンスの中で、私が最も注目したのは#14アマカと#8平下です。アマカは相手のセンター(#7ダフェ、#8チカンソ)のポストプレイとオフenseリバウンドを抑え、簡単に得点を許しませんでした。1年生のアマカは、東海大会の決勝で安城学園に大敗してからベストメンバーに抜擢された選手です。身体能力の高さと共に、1年生ながらディフェンスのうまさがる選手です。最終的に5ファウルで退場しますが、自分の役割を果たしたと言えます。どこまで伸びるのか、冬のウインターカップが楽しみになりました。平下は、岐阜女子が誇る3Pシューターの#9林に対して身体を張って守り1本も3Pシュートを決めさせませんでした。キックアウトのパスやスクリーンからのカットにも素早く反応して、ノーマークで打たれた場面はほとんどありませんでした。

この2人のディフェンスは他の選手にも波及し、岐阜女子の池田(32点)以外に2ケタ得点を許したのは、ダフェの、10点だけでした。

最後に、敗れはしましたが、岐阜女子の#4池田のシュート決定率には目を見張りました。キャプテンとして自分の役割を十二分に発揮しました。彼女は横須賀の坂本中学の出身です。